試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと

二〇二五年度　入学試験問題（前期・A日程）

国　語

※冊子裏面に「注意事項」がある。
監督者の指示に従い確認すること。

【一】 現代文① （必答問題） 受験者全員が解答すること

次の文章は、建築家の村野藤吾（一八九一―一九八四）について書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

なぜ、世界においてほぼ村野だけが、a大きくて、しかも小さな建築を作れたのだろうか。

村野が数寄屋建築という実験室を持っていたからだと僕は考える。村野は数寄屋建築という「小さな建築」を実験の場として利用し続けた。彼が自ら和風建築の専門家ではなく、和風建築はヨギ（ア）のようなものだと告白したのは、それが実験室であったことをほのめかした発言と読める。吉田五十八にとって数寄屋とは本業であり仕事であったが、村野にとって数寄屋とは実験室でありテロリストのラボのようなものであった。

そしてラボであったがゆえに、村野の数寄屋に入ると僕らは緊張がとけ、驚き、楽しくうきうきし、知的な想像がぐるぐると回転し始めるのである。たとえば千代田生命本社ビル（一九六六）の茶室に招かれた時の感動は忘れられない。天井と障子に用いられたあみだくじのようなユニークなパターンのスクリーンは楽しく自由だった。金属板の凸と凹の部材を組み合わせて雨を防ぐ、ペラペラの軒先も圧倒的であった。待庵の薄さをはるかに凌駕していた。村野が永遠に若く挑戦的であることを知った。

その村野の数寄屋に対する態度の基本にあるのは、すでに見た「民衆のための建築を作る」という人生を貫く哲学である。数寄屋とは基本的に茶道のための空間であり、日本において、茶道がしばしば限られた人々のための、しきたりに縛られた閉鎖的な芸事になっていることを村野は警戒していた。茶道こそが村野の一番嫌った「形式主義とペダンティズム」となっていたのである。b閉じて息の詰まる日本の茶室を、自由で知的な実験室として開放しようというのが村野の挑戦だった。吉田は、毎朝母と妻とが選んでくれた、文句のつけようがない、品のいい和服を身に着けたが、村野は地味でくすんだ背広を好み、現場では工事関係者と同

じような作業着を着て膝をつきあわせて職人と打ち合わせた。

この村野流のアプローチの中に、日本建築をもう一度、世界と、社会とつなぎ直すための大きな可能性があると僕は感じる。かつて二〇世紀のはじめに、*ライトは日本建築と世界とをつないでみせた。日本建築の持つ開放性と自由が、これからの時代の主役となる「小さな建築」の大きな武器であることをライトは発見した。その発見はモダニズム建築をニナ(イ)った若き*コルビュジエや*ミースに大きな影響を与え、日本建築は、時代を転換するひとつの*ヒンジの役割を果たした。

ライトは「大きな建築」を作ることには興味がなかった。超高層は非人間的であり、人間にはふさわしくない建物であると、一刀両断に否定しバトウ(ウ)した。彼は水平的な建築を生涯作り続けたが、時代の要請を受けて避けようもなく大きくなっていく建築をどのようにヒューマンなものにするかは、関心の外にあった。

再び世界は、日本の伝統に何かを期待しているように僕は感じる。二〇世紀初頭、日本の知恵は、小さいながらも快適な「小さな建築」を作って、民衆に大量の家を提供するために用いられた。しかし二一世紀、すべてが大きくなりすぎて、すでに何も建てる場所がなくなった世界にわれわれは生活している。大きくなりすぎた建築を、大きくなりすぎた都市を、少しでも居心地のよいヒューマンなものへとだましだまし転回させていくために日本の知恵を使うことはできないだろうか。

ひとつのヒントとなるのが、大きなものと小さなものをつなぐ中間的な装置だと僕は考えている。*先述したように北欧の建築家は「大きな建築」に対抗しようとしたが、結局、家具やプロダクトデザインなどの小さなものに頼るしかなかった。一方村野は、小さくも大きくもない中間的なスケールのものを駆使した。和室を構成する襖や障子、畳などは、そのような中間粒子の代表であるが、村野は*ファサードにつける庇(ひさし)（たとえば唐破風(*からはふ)）やバルコニーをも中間粒子として自由に駆使し、大きいものと小さいものをつないだ。

日本建築を構成するエレメントのほとんどは、その中間性・両面性を持っている。それゆえにこれらの中間粒子は、変化し続ける人間という要素と、環境という、同じくらい変化し運動し続ける要素との間にあって、それらを巧みにつないできた。(C)日本建築

の本質は中間性であり、両面性である。

村野は数寄屋というラボを手に入れることによって、これらの中間粒子の大きな可能性に気付き、実験を繰り返した。様々な建築エレメントを中間粒子として再定義し、そのアプリケーション*の実験を行い、建築とプロダクトの中間スケールを持つ、軽やかな中間粒子によって、古臭い形式性や象徴性から建築を解放していった。

中間粒子とは、増改築を容易にする目的のために、日本建築が生み出し、洗練させた手法だった。建築全体が中間粒子の集合体へ近づいていけば、その着脱と移動で建築はいかようにも変化しうる。日本建築の歴史において特筆すべきは、主屋（おもや）という本体構造の外部に張り出して作られた下屋（げや）と呼ばれる付属部分が主屋と同様の重要性を持っていたことである。下屋は本来は増築で作られたオマケの空間であるが、このオマケが日本建築の空間を豊かにしていった。中国でも朝鮮半島でも下屋の手法を見つけることはできない。縁側もオマケだったし、すべての中間粒子が着脱可能なオマケだったと言ってもいい。日本建築とはオマケが集まってできたオマケの建築だったのである。[d]オマケの手法は日本で独自の進化をとげ、日本建築を豊かでフレキシブルなものにしてきた。

柱のような、建築全体を支える主要部材さえ、日本人は中間粒子とすることに成功した。天井と屋根との間を和小屋と呼ばれるリジッド*な構造体で埋めてしまうことによって、天井の下に位置する柱はいかようにも移動することができるという、世界に例のないフレキシブルな構造システムを日本人は発明した。柱は移動できないというのが世界の建築の不変の大原則である。しかし日本人は増改築において、当たり前のように、柱を動かしてしまう。木造建築の技術は大陸から伝わったが、この移動する柱は中国にも朝鮮半島にも存在しない。室町時代に完成したといわれるこの和小屋システムによって、日本人は柱さえも中間粒子として再定義したのである。

村野は中間粒子を道具箱の中にたずさえていたので、「増改築の達人」と呼ばれた。日本橋髙島屋の増改築において、村野はガラスブロックという中間粒子を駆使した。通常の建築家ならば、髙島屋の旧館のような様式建築に、ガラスのカーテンウォールを

対比させることでカーテンウォールの近代性を引き立てるような演出をする。しかし村野はここでガラスブロックという半透明な中間粒子を発見した。ガラス製の障子のような中間粒子を用いて、石の本館自体をやわらかく感じさせたのである。そのガラス製の障子は日本橋の街の中に見事に融け込み、日本橋の裏通りは、この障子によって生気をとり戻した。壁でもなくガラスでもない障子という中間粒子が日本建築の中で果たしてきた役割を村野は熟知し、それを都市という大きな場所に展開した。

*迎賓館の昭和の大改修（一九六八―七四）も、村野がいかに増改築の達人であったかを示す作品である。インテリアにおいては、白でもベージュでもない中間的な白色塗装によってすべてがやわらかく融け合っている。しかし僕が最も注目するのは、入り口廻りの柵（エ）と小さな守衛所である。

村野はまず黒色に塗られていたスチール製の柵を白く塗り直したのである。バッキンガム宮殿をはじめとして、ヨーロッパではこの種の柵は、ほとんど黒に塗られている。その背後に控える宮殿という大きな建築をよりひきたてるため、より大きく見せるために柵は黒いのである。ところが村野はその通例を打ち破って、白に塗った。高島屋で透明なガラスカーテンウォールを嫌って乳白色のガラスブロックを用いたように、鉄製の柵は白く塗られたことによって軽やかな存在感を持つ中間粒子へと変身した。

入口の両脇に新しく建てられた丸い屋根の載った守衛所も、中間粒子と呼ぶにふさわしいヒューマンなかわいらしさを湛（たた）えている。もしこの守衛所を、片山東熊（かたやまとうくま）（一八五四―一九一七）設計の迎賓館本体の*バロック様式に揃えてデザインしたならば、ヒューマンで軽やかな粒子感が達成されることはなかっただろう。村野は様式建築のルールを破ってまで、粒子の軽やかさにこだわり、白い柵とかわいらしいおもちゃのようなパヴィリオンによって、［　A　］の重苦しい建築でしかなかった迎賓館を、東京という［　B　］の都市にスムーズに接続した。

そして村野は木造の自宅においても増改築を繰り返した。鴨居（かもい）や長押（なげし）のような木の部材の位置を高すぎる／低すぎると悩みながら何回も付け替えた。おもしろいことに、村野はその修正によって生じた切り欠きの跡や部材の色違いを消そうとせず、堂々と放置した。中間粒子たちが様々に移動し変化する様子を彼は楽しんでいたように見える。その自由な移動、変化の中に日本建築の本

質があり、その流動性こそが、日本建築の空間に軽さと楽しさを与えていると、村野は見抜いていたのである。

この村野の増改築に対するスタンスもまた、ヨーロッパ流の建築保存の考え方、時間に対する姿勢とは対極的である。西欧において、建築とは象徴的でなければならないと同時に、永劫の存在でなければならなかった。モニュメントという単語はその両方を指していた。しかし村野はマッチョな象徴性を嫌っただけでなく、永劫性に対して違和感を抱いていた。永劫のものなど、この世の中には存在しないというのが、村野の時間に対する哲学なのである。だから村野はあれほどのエネルギーをもって増改築に取り組み、リノヴェーションの傑作を世の中に残すことができた。村野は建築の保存という点においても、西欧的な時間概念に対する辛辣[オ]な批判者として再発見されるべき存在である。西欧建築の本質に対する村野以上の厳しい批判者を、いまだに僕は見つけ出すことができない。

（隈研吾『日本の建築』による）

注　＊数寄屋建築――茶室を元にした日本の伝統的な建築様式。自然環境との調和、簡素な装飾などに特色がある。

＊吉田五十八――建築家（一八九四―一九七四）。数寄屋建築の近代化に貢献した。

＊ラボ――ラボラトリー（laboratory）の略。実験室。

＊待庵――千利休作と伝えられる国宝の茶室。京都山崎の仏教寺院・妙喜庵にある。

＊ライト――アメリカの建築家（一八六七―一九五九）。環境と一体化した有機的建築を提唱した。

＊コルビュジエ――フランスの建築家（一八八七―一九六五）。

＊ミース――ドイツ生まれ（アメリカに亡命）の建築家（一八八六―一九六九）。

＊ヒンジ――元来は蝶番（ちょうつがい）の意だが、ここではつなぐもの、接合部という意味で用いられている。

＊先述したように――筆者は本文より前で、一部の北欧の建築家たちにも「小さな建築」への志向性があったが、大きな

建築自体においては実を結ぶことはなかったと述べている。

＊ファサード――家・建築物の正面。

＊唐破風――そり曲がった曲線状の破風。破風は屋根の切妻にある合掌形の装飾板。

＊アプリケーション――応用、適用。

＊リジッドな――堅固な。

＊迎賓館――東京元赤坂にある、外国の賓客をもてなすための建物。フランスのベルサイユ宮殿をモデルとし、明治四二年（一九〇九年）竣工。

＊バロック様式――ヨーロッパで一七～一八世紀に流行した建築・美術の様式。

問1 傍線ア～ウのカタカナを漢字で、傍線エ・オの漢字の読みを平仮名で、それぞれ書きなさい。**→解答用紙はB**

ア ヨギ　　イ ニナ（った）　　ウ バトウ　　エ 柵　　オ 辛辣

問2 傍線ａ「大きくて、しかも小さな建築」とあるが、その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は1**

① 大きな建築とはいうものの、実体は小さな建造物を寄せ集めて造られた建築。

② 西欧的な大きな建築であり、かつ一部に日本的な意匠も用いられている建築。

③ 大きな建築でありながら非人間的にならず、居心地のよさを兼ね備えた建築。

④ 主屋は壮麗な大きな建築で、それに付随して簡素な下屋があしらわれた建築。

⑤ 実際には大きな建築なのに、その大きさが目立たないように設計された建築。

問3 傍線ｂ「閉じて息の詰まる日本の茶室」とあるが、村野にとって、なぜ「日本の茶室」は「閉じて息の詰まる」ものなのか、六〇字以内で記述しなさい。（句読点等も一字と数える）**→解答用紙はB**

問4 傍線ｃ「日本建築の本質は中間性であり、両面性である」について、次の問いに答えなさい。

［1］ ここにいう「中間性」とは、どういうことか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は2**

① 西欧的な要素と日本的な要素の両方を持ち、二つをつなぐ役割をするということ。

② 環境でも人間の身体の一部でもあって、不断に変化し続けるということ。

③ 伝統を重んじる面と革新的な面とを、それぞれ使い分けられるということ。

④ 対立する二つのものの仲立ちとなり、両者を接続させるものであるということ。

⑤ 大小の建築の性質を併せ持ち、それらの巧みな一体化を可能にするということ。

［2］「日本建築の本質」に対し、西欧建築の本質を表している言葉を、次のイ～ホのうちから**二つ**選び、その記号を**記述式の解答用紙**に記入しなさい。**→解答用紙はB**

イ 象徴性　　ロ 開放性　　ハ 永劫性　　ニ 流動性　　ホ 近代性

問5 傍線ｄ「オマケの手法」とあるが、その内容としてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は3**

① 建物を住みやすくするため、日本で発明された様々な部品を付け足していくこと。
② 建物を変化させやすいように、付属的な部分の集合体として全体を構築すること。
③ 建物を増改築することを見越し、意図的に堅牢（けんろう）な部材を用いずに建築すること。
④ 建物が簡単に壊れたりしないように、付属部分が充実した構造物にすること。
⑤ 建物の補修を容易にするため、主屋的な部分よりも下屋的な部分を重んじること。

問6 空欄Ａ・Ｂに入る語の組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は4**

①	A 過去	B 現代
②	A 日常	B 非日常
③	A 周辺	B 中央
④	A 現実	B 非現実
⑤	A 石造	B 木造

問7　本文の内容に合致するものを、次のイ～ヘのうちから**二つ**選び、その記号を**記述式の解答用紙**に記入しなさい。**→解答用紙はB**

イ　日本橋髙島屋と迎賓館はどちらも様式建築という点で共通しており、村野はそれらを増改築する際、その様式美を引き立たせる工夫をした。

ロ　中間粒子を道具箱の中にたずさえていた村野は、柱という主要部材さえも移動できるようにする技術を新たに開発し、それを増改築に活用した。

ハ　「大きな建築」に興味がなかった点でライトと村野の考えは同じであり、両者とも日本建築の特長を生かして、新しい建築の可能性を拓こうとした。

ニ　村野は増改築の達人と呼ばれ、中間粒子が自由に移動し変化することを楽しんでいたが、その変化の痕跡は残さないよう細心の注意も払っていた。

ホ　吉田五十八と村野は、数寄屋を扱う建築家という点では同じだが、それぞれの考え方は異なっており、その違いは両者の服装にも表れていた。

ヘ　中間粒子を用いて増改築を容易にするという発想は、もともと日本建築に存在していたものだが、村野はこれを現代における建築の刷新に応用した。

【二】 現代文②（選択問題）

国語国文学科以外を受験する者は「【二】現代文②」か「【三】古文」のどちらかを選択し解答すること。

国語国文学科を受験する者（同一日程での併願を含む）は選択解答できない。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長らくクイズ王という肩書きで仕事をしていても、求められるのはもっぱら「クイズを解く」もしくは「クイズを作る」ことだ。王統の正当性を示したりとか、クイズ業界を束ねたりとか、そういったニーズはほとんどないようである。

クイズという国は随分に小さいが、ここ五年ほどは注目を集めている。ゆえに、どうにか世間におけるクイズのプレゼンスを確保したいと常々思っていた。奇しくもブームの中心にいられたので、私はここ五年ほど、「王」らしく「クイズ史」の研究をしている。研究というより「a情報収集と編纂」と呼ぶのが正確ではあるのだが、そうした積み重ねを二〇二一年に『クイズ思考の解体』（朝日新聞出版）という書籍にて発表した。全四八〇ページのうち一〇〇ページ以上を歴史記述に割き、それを大手出版社から出すことは、クイズ文化を広めていくうえでの個人的念願であった。

クイズという文化自体は戦前から日本に存在したものの、言葉として定着したのは戦後すぐの時期。ラジオやテレビを通したクイズ文化の普及・定着には*ＧＨＱが大きな役割を果たしていたといわれている。家父長制の打破を掲げたＧＨＱにとって、お茶の間の皆が参加できるクイズというのは家庭内階級を再構築するためにうってつけだったようだ。その後は海外旅行解禁による賞品の高額化と視聴者の参加、海外映像とクイズの融合、平成初期のb カルチュラルリテラシー崩壊に伴うクイズ番組の激減、「*トリビア」

的視座でのフッケン[ア]……などを経てクイズ史は現在に至る。

そもそも、クイズ史に特化した書物はほとんど存在しない。あるにしても、メディア論の一部としての部分的なものだったり、検証のなされていないオーラル・ヒストリーであったりと、「歴史書」足り得るものはなかったといえよう。

クイズを楽しむプレーヤーの多くがクイズ史にさほど興味がなく、検証自体あまり行われていなかったことがその要因のひとつだ。たとえば、クイズ業界では「不景気の際には、低予算で済むクイズ番組が他のバラエティに比べて増加する」という言説が長らく信じられていたのだが、これは九〇年代後半におけるクイズ番組の少なさなどから容易に批判可能である。

クイズ界の内外に需要がなかったクイズ史だが、誤った認識が広がることを防ぐ意味では存在そのものに価値がある。古色蒼然（そうぜん）とした認識を整理し、批判検討しながら事実を綴（つづ）る、ということは立場を得た自分がするべきことだ、という思いがあった。

もちろん、これは非常に骨の折れる作業で、歴史家というのがいかに大変な仕事なのか、その一端を感じることができた。資料を集め、話を聞き、それらを並べたうえで論じる……手法もなにもない素人が徒手空拳[イ]で挑むものではない。慎重を期して、ゆっくりと進める以外になかった。ただただ事実を羅列するだけでは読み物にならないし、かといって取捨選択や解釈を必要以上に介在させてはならない。先例が少ないのだから余計にである。「独自の史観で綴る」ことは明記したが、果たしてそれが史観なのか、ただの言い訳なのかはいまだ不安だ。

さらに事態を難しくしていたのは、私自身が歴史の渦中にあり、[c]語るより語られる立場であったことだ。

たとえば、平成後期から令和にかけてのクイズ史は、私の出演する『東大王』など「学歴」と結びついた番組が支えていた。

近年のクイズ番組は、平成初期にカルチュラルリテラシー、つまりは「全国民が知っておくべき統一感のある教養」という概念が壊れた世界を前提として作られている。それゆえ、クイズ番組で国民に対し納得感を持って問えるワード、というものが少ないのだ。そんな状況でなおクイズ番組を作るのであれば、ある知識に対して「知っていると良い」というお墨付きが必要になるのだが、そこでうってつけだったのが「学歴」というツールであった。私はその「知っていると良い」という価値観のにない手として、

クイズ番組に登場したということになる。

多少の贔屓目が入っていたとしても、二〇一〇年代のクイズ史を語るうえでは、自己言及を避けられない。となると、勝者によって綴られた過去の様々な歴史的証言と同じように、公平性を欠くものだという視点からは逃れられないだろう。

自分しかやらない仕事が、自分には不適であるという事実が、時折執筆の邪魔をする。悩みの中でせめてもの言い訳を探して、私は先例を求めた。もちろん、規模感が全く違うのでおこがましい話なのだが、立場あるものが自己言及を含む歴史記述をしていいものなのか、それ自体を歴史に問うたのである。

*北畠親房の『神皇正統記』が、私の導き手となった。私が学生のころは「南朝の正当性を示すために書かれた」と習ったものだが、そうでない解釈もメジャーであるということを知ったのはだいぶあとになってからだ。

主流な解釈の一つに、幼き後村上天皇に対して、儒教的観点を通して帝王学を語った書である、というものがある。親房が、みずからの政治的立場とは切り離し、時には敵対する勢力を褒め、味方の問題点を指摘し、というスタンスで執筆を行った、というのが論拠の一つだという。

もちろん私の立場では、どのように書かれたのか、どれが正解かということを明言はできない。どちらかの説が一〇〇％正しいということでもなく、本来の意図は混ざり合っていたかもしれない。そのうえで、南朝方の中枢にあり続けた親房が、なおその公平なスタンスを保つことができたことに驚く。当時の書物が持つ影響力は現代の尺度では測れないものだが、センオウ(ウ)のための道具に用いることは何ら難しくなかったはずだ。しかし、そこにおそらくは教育的な熱意だったり、過去への畏敬だったりがあってこその、公平な筆致だったのではないだろうか。自らの立場があってもなお、起きている事実に真摯であろうという態度が文章に表れた、と私は考えたくなった。

それを踏まえて、自らについて考えてみる。『神皇正統記』のケイイ(エ)について一面的なことしか教わらなかったことは、自分にとっては不安材料だ。北畠親房自身の意図とは別に、当時の立場のみから自己弁護的に解釈されうる(d)、という実例ともいえよう。

一方で、筆致でもって誠意が伝わることもある、ということもこの事実は示唆[オ]している。「誠意」そのものが存在したかどうかも証明不能だが、親房の真意を探ろうという議論が続いているだけでも、私にとってはだいぶありがたい。この議論自体が、明確な意志を持って綴ることで当事者というバイアスを越えうる、ということの証左になるからだ。

かくして私は、戦後から令和までのクイズ史をまとめ、出版に至った。多少冗長になろうとも、意図や立場を明確にして真摯に綴ることを心がけた。この真摯さとは、「真面目に」といった精神論ではない。出典の明記や諸説併記、自己解釈が入る部分は明示するなど、当たり前を丁寧にやることだ、と私は考えた。南北朝時代とは誠意の形も違うだろうが、「自らの遺(のこ)したいものに真摯で、公平である」という意志は通底しているはずだ。誰かがそれを読んだ時、私の成果だけでなく不足までもが手に取れることが理想である。北畠親房の考えたことが、[e]その筆致からうかがい知れるように。

開き直りではない、地道な誠意。果たして、私の努力は北畠親房に近づけるものだっただろうか。

（伊沢拓司「歴史を作る、歴史を書く」により、一部表記を改めた）

注　＊ＧＨＱ――第二次世界大戦後、連合国軍が日本に設置した総司令部。占領政策を日本政府に施行させた。

＊トリビア――瑣末なことに関する知識。

＊北畠親房――鎌倉・南北朝時代の公家。南北朝時代には、朝廷が大覚寺統（南朝）と持明院統（北朝）に分かれ、対立した。

問1 傍線ア・ウ・エのカタカナを漢字で、傍線イ・オの漢字の読みを平仮名で、それぞれ書きなさい。**→解答用紙はB**

ア フッケン　　イ 空拳　　ウ センオウ　　エ ケイイ　　オ 示唆

問2 傍線a「情報収集と編纂」とあるが、「編纂」をする際の方針や心構えを述べたものとして、適切ではないものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は1**

① 情報の出典を必ず明記し、諸説ある場合は併記すること。
② 歴史認識の整理と批判検証を、誠意をもって行うこと。
③ 記述内容の不足さえも明瞭になるように心がけること。
④ 自分独自の解釈が入る部分はその旨を明示すること。
⑤ 歴史記述を真面目に行えるように精神力を高めること。

問3 傍線b「カルチュラルリテラシー崩壊に伴うクイズ番組の激減」とあるが、なぜクイズ番組は「激減」したのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は2**

① 全国民が知りたいと思うような知識が多様化し、多くの国民がクイズよりも情報番組の方に関心を向けるようになったため。
② 全国民の教育水準が向上し家庭内階級も平等になった状況では、クイズ番組で知識の優劣をつける意味もなくなったため。
③ 全国民に通用するような教養概念が壊れた結果、広く国民が納得して享受できるようなクイズが成り立ちにくくなったため。
④ 全国民の興味はクイズよりバラエティに移ってしまい、結果として統一感のある教養という概念も崩壊してしまったため。
⑤ 全国民の統一的な教養レベルが崩壊する一方で経済的水準は向上し、低予算で済むクイズ番組に頼る必要がなくなったため。

問4 傍線ｃ「語るより語られる立場であった」とあるが、この「立場」からクイズ史を語るとどうなるのか。これを説明した次の文の空欄に当てはまるもっとも適切な言葉を、本文中から五字以内で抜き出しなさい。**→解答用紙はB**

クイズ史を語るにあたり、勢いその歴史記述の中で［　　］をせざるをえなくなる。

問5 傍線ｄ「当時の立場のみから自己弁護的に解釈されうる」とあるが、『神皇正統記』に即して言えば、これはどういうことか。このことを説明した次の文の空欄に当てはまる内容を、四〇字以内で記しなさい。（句読点等も一字と数える）**→解答用紙はB**

『神皇正統記』は、［　　］と解釈されうること。

問6 傍線ｅ「その筆致」とあるが、それはどういう「筆致」か。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は3**

① 儒教的な観点から歴史を根本的に見直そうとする筆致。
② 味方よりむしろ敵に与（くみ）するような悠然とした筆致。
③ 事実そのものに対する厳格で真摯な態度が表れた筆致。
④ 正統を継ぐ幼い天皇への愛情と敬意に満ちた筆致。
⑤ 自らの史観を極力目立たないように表そうとする筆致。

問7 筆者の考えに合致しているものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は4**

① 筆者の立場では、自作のクイズ史は公平性を欠くという観点を免れられないが、誠意を尽くせば歴史書としての評価が与えられる可能性はある。

② 筆者がクイズ史を書こうとしたのは、クイズ王としての王統の正当性を示すとともに、クイズ文化にまつわる誤った認識を正そうとしたからである。

③ 筆者の著したクイズ史は、当事者というバイアスを越えることはもとより不可能であり、自ら遺したいものを遺すことで満足しなければならない。

④ 筆者はクイズ王として、クイズ史を著してほしいという業界からの求めに応じ、今まで存在しなかった困難な歴史記述に挑戦することになった。

⑤ 筆者は歴史の中から北畠親房という先例に倣うことで、クイズ史を書く仕事が自分には不適であるというジレンマを解消することができた。

【三】古文（選択問題）

国語国文学科を受験する者（同一日程での併願を含む）は全員解答すること。

国語国文学科以外を受験する者は「【二】現代文②」か「【三】古文」のどちらかを選択し解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、民部卿藤原の忠文（ただふみ）と云（い）ふ人ありけり。この人宇治に住みければ、宇治の民部卿となむ、世の人云ひける。

*鷹をぞ極めて好みけるに、その時に重明（しげあきら）の親王と云ふ人おはしけり。その宮も、また鷹を極めて好み給ひければ、忠文の民部卿の許（もと）に*吉（よ）き鷹あまたありと聞きて、A「それを乞はむ」と思ひて、忠文の宇治に居たりける家におはしにけり。

忠文、驚き騒ぎていそぎ出で会ひて、「こは何事によりて、思ひかけず渡り給へるぞ」と問ひければ、親王、「鷹あまた持ち給へる由を聞きて、それ一つ給はらむと思ひて参りたるなり」①と宣（のたま）ひければ、忠文、B「人などを以て仰せ給ふべき事を、C「かくわざと渡らせ給へれば、D「いかでか奉らぬ様は侍（やう）らむ」と云ひて、鷹を与へむとするに、鷹あまた持たりける中に、第一にして持たりける鷹は、世に並びなく賢かりける鷹にて、E「雉に合はするに、必ず五十丈*が内を過ぐさずして取りける鷹なれば、それをば惜しみて、次なりける鷹を取り出でて与へてけり。それも吉き鷹にてはありけれども、(2)かの第一の鷹には当たるべくもあらず。

さて、親王鷹を得て、喜びて自らする*て京にかへり給ひけるに、道に、雉の野に臥したりけるを見て、親王この得たる鷹を合はせたりけるに、(3)その鷹つたなくて、鳥をえ取らざりければ、親王、「かくつたなき鷹を得させたりける」②と腹立ちて、忠文の家にかへり行きて、(4)この鷹を返しければ、忠文鷹を得て云はく、「これは吉き鷹と思ひてこそ奉り［　甲　］。さらば異（こと）鷹を奉らむ」

と云ひて、「かくわざとおはしたるに」F と思ひて、この第一の鷹を与へてけり。

親王、またその鷹をすゑてかへりけるに、木幡の辺にて試みむと思ひて、野に犬を入れて雉を狩らせけるに、雄*の立ちたりける③に、この鷹を合はせたりければ、その鷹、また鳥を取らずして、飛びて雲に入りて失せにけり。しかれば、その度は、親王いかにG(5)も宣はずして、京にかへりにけり。

これを思ふに、その鷹、忠文の許にては並びなく賢かりけれども、親王の手にてかくつたなくて失せにけるは、鷹も主を知りてH④あるなりけり。

しかれば、智り無き鳥獣なれども、本の主を知れる事かくのごとし。いかにいはむや、心あらむ人は、故を思ひ専らに親しからむ人の為には吉かるべきなりとなむ語り伝へたるとや。I⑤

（『今昔物語集』による）

注　*鷹――ここでは、鷹狩のこと。鷹と犬を用いて小動物の狩りをする。

*吉き鷹――鷹狩によい鷹。

*五十丈――約一五〇メートル。

*雄の立ちたりける――雄の雉が飛び立った

問1　傍線A「それを乞はむ」の文中の意味としてもっとも適切なものを、次の①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

→解答用紙はA、番号は1

① 忠文に鷹狩をしたいと伝えよう
② 忠文のところに出向きたいと言おう
③ 親王の飼っている鷹を忠文に育ててもらおう
④ 忠文の飼っている鷹の中から一羽をもらおう
⑤ 親王の飼っている鷹と忠文の鷹を交換してもらおう

問2　傍線B「人などを以て仰せ給ふべき事を」・傍線D「いかでか奉らぬ様は侍らむ」を現代語訳しなさい。**→解答用紙はB**

問3　傍線C「かくわざと渡らせ給へれば」・傍線F「かくわざとおはしたるに」とあるが、詳しく説明するならばどのような意味か。もっとも適切なものを、次の①～⑤からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号はCは2、Fは3**

① 親王が自ら出向いて、鷹への熱意を示して下さったのだから
② 一度ならず二度までも、親王の鷹への知識の深さを示されては
③ 忠文の鷹の選択は故意であり、素知らぬふりをしていらしたところ
④ 親王が忠文に任せず、自ら鷹を選ぼうとして来て下さったのだから
⑤ もっとよい鷹がいるはずだと、親王自ら戻って来られたからには

問4 傍線E「雉に合はするに、必ず五十丈が内を過ぐさずして取りける鷹」とあるが、どのようであったことをいっているのか。もっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は4**

① 雉のあとをつけて、必ず一五〇メートル以内で雉が狙っていた獲物を横取りできる鷹
② 雉を狙っている人間を、必ず一五〇メートル以上追ってから見つける鷹
③ 雉に向かい合うと、必ず一五〇メートル以上追ってから仕留める鷹
④ 雉を狙わせると、必ず一五〇メートル以内で雉を仕留める鷹
⑤ 雉と競い合わせると、必ず一五〇メートル以上追い続ける鷹

問5 傍線（1）「次なりける鷹」、（2）「かの第一の鷹」、（3）「その鷹」、（4）「この鷹」、（5）「この鷹」のうち、同じ鷹を指す組み合わせとして適切な組み合わせを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は5**

① （1）（2）と（3）（4）（5）
② （1）（2）（4）と（3）（5）
③ （1）（3）（4）と（2）（5）
④ （1）（2）（3）と（4）（5）
⑤ （1）（3）（5）と（2）（4）

問6　空欄 甲 に入る語としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。→解答用紙はA、番号は6

① つる
② つれ
③ けり
④ ける
⑤ ぬる

問7　傍線G「その度は、親王いかにも宣はずして」とあるが、なぜか。本文の主旨にてらしてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。→解答用紙はA、番号は7

① どの鷹も、親王の言うことは聞く気がないことを親王が悟ったから。
② 雄の雉をねらわせても、ろくな働きはしないと親王が気づいたから。
③ どの鷹も、親王の言うことを聞く気がないことに忠文が気づいたから。
④ 何度言われても、親王の命令を聞く鷹を探し当てられないと忠文が悟ったから。
⑤ いくら忠文に抗議しても、鷹のしつけを改める気持ちがないと親王が見抜いたから。

問8 傍線H「鷹も主を知りてあるなりけり」とはどういうことか。もっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は8**

① 鷹も使い手の能力を恐れているのだった
② 鷹も自分たちを手放さねばならない忠文に同情しているのだった
③ 鷹も自分たちのもとの主人は親王だったということを忘れないのだった
④ 鷹も誰が自分たちの本当の主人かを知っているのだった
⑤ 鷹も親王が忠文の主人だということを知っているのだった

問9 傍線I「吉かるべきなり」とは誰がどうすることをいうのか。もっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は9**

① 鳥獣も、親しい気持ちを持つ人に対してはそれを伝えようとするものだ
② 人間も、縁の深い人に対してはそれにふさわしい態度を取るべきだ
③ 鳥獣も、なつきたいと思う人に対しては命令に従うものだ
④ 人間も、今までの付き合い方をふまえた態度を取りがちだ
⑤ 鳥獣も、思いやりのある人に対しては従順な姿勢になるものだ

問10 本文四行目、二重傍線「思ひかけず渡り給へるぞ」と、文法上同じものを、二重傍線①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。**→解答用紙はA、番号は10**

注意事項

一. 問題は、大問【一】から【三】までである。大問【二】【三】はどちらかを選択し解答すること。ただし、国語国文学科を受験する者(同一日程での併願を含む)は、左記に指示された問題を選択し解答すること。

【一】現代文① 必答問題 受験者全員が解答すること。

【二】現代文② 選択問題 国語国文学科を受験する者(同一日程での併願を含む)は選択解答できない。

【三】古文 選択問題 国語国文学科を受験する者(同一日程での併願を含む)は全員解答すること。

二. 解答用紙は、A(マークシート方式)とB(記述方式)の二枚ある。監督者の指示に基づき、所定欄に受験番号と氏名を記入すること。

三. 解答は、すべて解答用紙に記入し、欄外には何も記さないこと。

四. 選択問題【二】【三】は、選択した大問について、解答用紙の所定欄に○印を付けること。

なお、次の場合はその大問のすべての解答が無効となる。

・所定欄の大問選択がなされていない場合

・所定欄の大問選択と異なる大問を解答した場合

・解答用紙AとBで選択した大問が異なる場合

・選択できない大問を解答した場合

五. 試験時間は、六〇分である。